

# かほくワークシート

## 河北春秋

夏の高校野球の地方大会が各地で熱い。宮城県大会では東北と仙台育英の強豪2校が準決勝で対決。東北が延長十一回、サヨナラ勝ちした。宮城の高校野球をけん引する両校の意地を感じさせる熱戦だった▼この因縁のカードで今も忘れられないのは2006年の決勝。両主戦投手による息詰まる投げ合いは延長十五回0-0で譲らず、異例の引き分け再試合となった。翌日は仙台育英が6-2で勝ち、5年ぶりの甲子園切符を手にした▼2試合で計374球を投げ抜いた仙台育英の2年生エースが佐藤由規投手（仙台市出身）だった。力感あふれるフォーム。うなるような剛速球で三振を奪った。翌年の夏の甲子園で計測された155km/hは、最速記録を更新した▼鳴り物入りでプロ野球ヤクルトに入った由規投手。3年目に12勝を挙げたが、肩などの故障が続き、実戦から長く遠ざかることになる。どれほど苦しい日々だったろう。「数え切れないほど多くの人に支えてもらった」▼5年ぶりの復活を遂げた今季。24日の中日戦で先発登板し、11年9月以来の勝利投手になった。力で押すスタイルは影をひそめた。「とにかく今は一生懸命投げている」。1軍マウンドに立つ喜びにあふれる。10年前の夏も一球一球に魂を込めていた。その姿とダブる。(2016.7.28)

(2016年7月28日河北新報朝刊)

①記事を読み、( )に当てはまる言葉を書き入れましょう。

佐藤由規選手は2006年、( )高校在学時、夏の高校野球宮城県大会の決勝で( )高校と戦った。延長( )回でも勝敗は決まらず、異例の引き分け( )となった。翌日6-2で勝ち、( )切符を手にした。高校卒業後はヤクルトに入団し、剛速球の投手として活躍していたが、( )の故障が続き、しばらく実戦から遠ざかっていた。そして今季、長いリハビリの末、( )年ぶりの復活を遂げた。( )スタイルは影をひそめ、変化球主体に変えての勝利だった。

②由規選手は、7月9日に1771日ぶりに登板し、7月24日には、勝利投手になりました。どのようにして苦しい日々を乗り越え復活したのだと思いますか。由規選手の言葉などを参考に、考えて書きましょう。

年 組 名前

(中学生/朝の会、10~15分)